

る)課題の訓練が、2頭のニホンザルを被験体に行なわれた。訓練後、“同じ”という刺激間関係に基づく反応が、種類あるいは次元を異にする新しい刺激に対するどの程度転移するか、つまり、一般化しうる概念による学習の成立の有無が確かめられた。

その結果、2頭共に、同一次元(形)の刺激に対しては、多種類の訓練刺激の経験と正確で安定した反応の維持があれば、充分転移することが認められた。異次元(色)の刺激に対しては、1頭についてのみ、同様の事実が認められた。

今後は、見本合わせ課題も含め、複雑な刺激間関係に基づく反応の学習について、行動分析的アプローチをさらに進め、個体認知の問題に迫りたい。

コロブス属における Fossa suborbitalis の形態学的分析

松 本 真

系統部門教授江原昭善の指導のもとで、霊長類頭蓋骨の形態学的研究を行なっている。頭蓋骨は多くの構成要素から成り、多様な要因による変異性を示しており、その形態の解析は各分類群の自然界における位置づけを考える際に非常に有意義で興味深いと思われるからである。

修士課程における具体的な研究として、霊長類研究所保管のコロブス属3種の頭蓋骨約300標本を中心にして他の分類群の標本を参考にしながら、顔面部の Fossa suborbitalis の形態の解析を行なった。この Fossa は *C. verus* および *C. badius* においては顕著に見られるが、*C. polykomos* においては存在せず、前二種と後種を区別するうえで極めて有効な特徴である。そうした区別ができることが、この Fossa を成立させている形態学的要件を精確に捉えた際にどのような意味をもつかという問題を検討した。

頭蓋計測および外部観察、骨解剖によって以下の結論を得た。コロブス属は眼窩下部において他の分類群から区別されるべき特徴を有しており、その基本的な要素は眼窩縁部および頬骨体部における二つの Pfeiler である。

C. verus においては前者の Pfeiler のみが発達し、*C. badius* においては頬骨前頭突起・側頭突起とともに両方の Pfeiler が発達している。*C. polykomos* においては特定の部分の発達がなく、頭蓋全体が長大扁平化している。このように捉えることにより、Fossa の有無以上の内容を持った眼窩下部の形態の属内変異を総合的に理解できる。

博士課程におけるテーマは、多数の分類群の頭蓋骨の全体的な主要構成要素の解析であるが、それを進めるかたわら生体計測、古人骨鑑定、他の組織の形態学的研究を行なっている。

所 内 談 話 会

昭和52年度には所内談話会が10回開催された。以下に演者と演題を記す。

1. 第53回 4月13日(水)
サル脳と人工頭脳 三 上 章 允
2. 第54回 5月18日(水)
海外学術調査(東南アジア)報告 江 原 昭 善
3. 第55回 6月22日(水)
哺乳類眼底の話 後 藤 俊 二
4. 第56回 7月20日(水)
幸島ニホンザルの現状 森 明 雄
5. 第57回 8月9日(火)
Arashiyama West Monkeys in Texas
Linda Wolfe
6. 第58回 9月14日(水)
海外帰朝報告 浅 野 俊 夫
7. 第59回 10月19日(水)
ヒトとチンパンジーの道具使用 杉 山 幸 丸
8. 第60回 11月24日(木)
血液凝固系の比較生化学 中 村 伸
9. 第61回 2月22日(水)
神経生理部門で行なわれている最近の研究について
久 保 田 競
10. 第62回 3月15日(水)
ニホンザルの視知覚とその発達 松 沢 哲 郎